



プロローグ

満たされた毎日を送っていた訳じゃない。
でも、当たり前の日々を送っていた。

美大を卒業したものの……姉のような才能があるわけでもなく、私はインテリアコーディネーターという職業を選んだ。

こじんまりとしたデザイン事務所でそれなりの仕事をこなし日々を送る。
仕事先で知り合った彼ともそれなりの日々を送っていた。

だが……、

ある日、彼と別れることとなった。

振り返れば、その辺りから私の身体は変調を来たしていたのかもしれない……。

白血病を発病してしまった。

最初は、この時代……もう死の病気とは言えないだろうと鷹を括り、いい加減な入院生活を送っていた。

しかし、化学療法が思わしくなく効果が出ない。

この頃から私は……段々と不安が募り始めた。

不安が招いたのか、予知でもしていたのか、治療法として放射線療法も始めることとなった。

白血病

付き添いの母に……、
ふいに思い出したことを尋ねた。

「ねえ……チロ元気かな？」

チロは、私が小学生の時に、フライトの為、あまり家にいない父が『優しい娘に育ちますように』と、誕生日にプレゼントしてくれたマルチーズ。
もう、今年で15歳になる。人間の歳で言えば、もうお爺ちゃんだ。

チロは真っ白でふわふわで、そして黒い目がとても可愛らしく。あっという間に家族のアイドルとなった。
私はといえば、犬というよりは妹が欲しかったから……そう、差し詰め弟という感じだった。

「チロ、元気かな？お母さん」

「ええ、元気よ」

「……会いたいな」

三階の病室から眺める、病院の中庭。
私は、チロの姿を中庭に写し見て……、

「ねえ、お母さん」

「チロ……連れて来れないかな？」

「え？」

「ほら、病室は無理でも、中庭とか駄目かな？」

「病院の中庭？」

「そうそう」

母は、困ったようにりんごを剥いてくれていた手を止め……、

「病院にご迷惑が掛かるだろうしね……」

「そっか……」

「りんご、食べなさい。千香子（ちかこ）」

「……いない」

拗ねた子供のように母に言うと、

「お母さん」

「写真……チロの写真！写真ならいいでしょ？」

「ええ、それならいいわよ。明日持って来るわね」

「ありがとう」

「じゃ、そろそろ。お母さん、帰るわね」

「ええ」

気が付くと、外は夕暮れ時。

晩秋の空が、一層、寂しさを連れて来るような気がした。

次の日。

母は約束通り、チ口の写真を持って来てくれた。

家族でチ口を囲んだ写真とチ口の嬉しそうにおもちゃを口に銜えた（くわえた）写真だった。

「ああ、この写真。懐かしいなあ」

私は、何故だろう……久し振りに、心穏やかになったような……そんな気がした。

化学療法と組み合わせた放射線療法。

成果が思わしくないのか？それとも、まだ時間が掛かると言うことなのか？

最近、母も詳しい状況を説明してくれない。

私は、次第に起き上がるのも億劫になり……気が付くと……、

「お母さん……チ口の写真。欲しいなあ」

チ口のことを口にしていた。

チ口が心配で仕方ないとか、恋しいとか、そんな気持ちが強い訳じゃない。

就職してからは、ほとんど散歩も連れて行ってやれなかった。

只……なんだろう……チ口に会いたかった。

入院生活が長引く……そのうちに私の病室は、チ口の写真で埋め尽くされていった。

ある日の夕暮れ。

「千香子、起きれそうかな？」

「お姉ちゃんがね、チ口を……」

母の視線が窓に向かう。

私は、母に支えて貰いベッドから起き上がると窓に向かった。

そこには、姉に抱きかかえられたチ口の姿があった。

「チ口！」

声が出ない。

力のある声を出すことが出来ず、チ口の名前を……力一杯呼んでやることは出来なかった。

それでも私は……、

「チ口、チ口、チ口」

と、呼び掛け。

私に気付いた姉が手を振り……、

それから、チ口が、私を見た気がした。あの愛らしい黒い瞳で。

「お母さん、チ口が……チ口が、私を見てくれたよ！」

「ええ……ええ」

次の日から、私は病院を……この病室を出たいと思うようになった。

治療の効果が思わしくないで何？そんなことは昨日のこと。

私は、生きてるんだ！

まだ、生きているんだ！

今の私に必要なことが白血病の治療ならば、受けて立とう。

「お母さん、昨日はありがとう。姉さんにも伝えておいてね、それと……」

「チ口にも、ありがとう、て」

「ええ、ええ」

「分かったわ」

「ねえ、お母さん、また、チ口を連れて来れるかな？」

「まあ、千香子。調子に乗るんじゃないわ」

「あははっ、ごめんなさい」

「ふふふっ」

母と二人で笑いあった。

母と向かい合って……笑いあった。

いつから笑って無いだろう。そんなことを考えた。

幾日かして、母が明るい顔で、病室に現われた。

「千香子」

「頑張ったね、治療の効果が出始めたって！」

「え？」

「白血病……治るかもしれないよ！」

「本当？」

「ええ」

私は、歓喜に満ちて、

「お母さん、お母さん」

私は涙しながら……、

何故だろう。チコの写真を抱き締めていた。

そんな私を母が抱き締め……、

「ありがとう」

私は……誰に言うでも無く感謝の言葉を呟いていた。

私を抱き締める母が震えているのが分かった。きっと、泣いているのだろう……私の為に。

「また、チコに会えないかな？姉さんに」

私の言葉を遮るように母は、

「今度、チコに会う時は……そうね、家で会いましょう？千香子」

「え？」

「あ……そうなんだけど……まだ、先の話でしょう？チコに……」

「チコももうお爺ちゃんだから、寒いのは可哀相じゃないかな？」

「それは……」

私は、私の言葉を遮って先の話をする母に違和感を感じて、

「お母さん？チコに、何か……」

「な、何かって？」

「チ口は元気よね？」

「え……ええ」

「お母さん？」

「チ口、ちょっと……ちょっとね、目の病気でね。ほら、もう、お爺ちゃんだから」

「チ口、目の病気でどうしたの？」

「その、入院。入院してるのよ」

「え……」

「だ、大丈夫よ？千景（ちかげ）……お姉ちゃんが、チ口の面倒はちゃんと見ているわ」

「それで、チ口、大丈夫なの？」

「ええ、ええ」

「そう、それならいいんだけど」

チ口、チ口。

何故だろう……、

無性にチ口の顔を見たくて、無性に抱き締めたくて。

「千香子。元気になろうね」

母が、慈愛に満ちた表情で言う。

「はい」

私は、驚くほど素直に返事をしていった。

チロ

治療の甲斐あり、退院が視野に入ったある日のこと。

私は夢を見た。

いや……現実ではなかったか？

と、今になれば思ったりもするのだけれど……。

夕暮れ時。

私の体調が良いものだから、母が早めに家に帰った日。

私は、カーテンも閉めず、ウトウトとしていた。

ワン！

犬の声？

「ん……」

ワン！

ベッドの足元を見ると、チロが居た。

「あれ？」

「チロ……」

「チロ？」

チロの黒い目。

チロが私を見ている。

「チロ。チロ、おいで」

チロは私の声を聞くと、千切れんばかりに尻尾を振って走って……では、これないらしい。

ベッドのふとんの上では、彼の蹴りは、思うように動かないみたいだ。

「ふふっ」

彼が、チロが、私の膝の上によく辿り着き、前足を掛け、いつものように膝に乗る。チロの爪の感触を太腿に感じ、チロが座ると、彼の暖かさがじわじわと沁みて来た。

「チー口」

いつものようにチロの頭を撫ぜる。
ふわふわで暖かくて、その感触は彼のものだった。

「チロ」

思わず、抱き上げようとした時、チロがじゃれ付くように私の胸に前足を掛け、私の顔をペロペロと舐め始めた。くすぐったい。

「チロ、くすぐったいよ」

思わず、声に出すが、チロは尻尾を振りながら私の顔を舐め続け……、
どうしたのかな？気が付くと、私は、目に熱いものを感じ、唇を噛み締めた。
唇を噛み締めたけれど、間に合わなくて……そのまま……涙が零れてしまった。

そんな様子の私に気付いているのか、いないのか、チロは私の顔をまだ舐めていて、私の涙も彼の舌で拭われた。

「チロ、チー口」

「チロ、なんだろうね？チロ」

「なん……ごめんね、チロ」

「あははっ」

「くすぐったいよ！」

私は、意味不明なことをチロに話し掛け、ふわふわしたチロの体を撫ぜながら、一時（ひととき）、じゃれ合った。

そのうちに彼は、私のひざで四つん這いになり、黒い目でじっと見詰めたかと思うと、小首を傾げ、

ワン

と、言うと、ベッドから飛び降り、病室を出て行ってしまった。

私は、

「あ、駄目だよ！チロ！」

「チロ！」

急にベッドから降りようとしてバランスを崩した私は、眩暈にも似た感覚に襲われ、転倒してしまった。

「チロ……駄目、よ」

「チロ……」

「……………」

夢のあと

次の日。

「千香子、千香子」

「大丈夫？千香子」

「ごめんなさいね、昨日、お母さん早く帰ったから……」

「今日も、お母さん。遅くなって……」

慌てて病室に飛び込んで来た母が、息を切らしながら言う。

「ど、どうしたの？お母さん、慌てて」

「昨日、ベッドから落ちて、床に倒れてたんだって？」

「え？」

「見回りに来た看護師さんが見付けて慌てたらしくて……」

「え？」

「あ……昨日……」

「昨日ね……」

「昨日ね、夢を見てたんだ」

「チロが、この病室にお見舞いに来てくれたの」

「えっ！」

何故か、困惑の色を浮かべる母の顔を見ながら……、

私は、話しを続けた。

「お見舞いに来てくれたチロと、ベッドの上でじゃれていたの」

「けどね、チロが、ベッドを降りて、病室を出て行ってしまったものだから……」

「私、追いかけてようとして……その時、ベッドから転倒したのかもしれない。ベッドから落ちたことも気が付かないなんてね……」

私は一呼吸置いて、

「お母さん、私」

「私ね、チロがお見舞いに来てくれた夢が、よほど嬉しかったのかもしれないね」

母は、私の話しに戸惑ったように見えた。

が……、

「あらあら」

その戸惑いの表情も、母が、言葉を口にする頃には消えていて……、

「千香子」

「あんまり、心配させないでね」

「あははっ……」

「ごめんね、お母さん」

私を子供のように叱る母はいつもの母で、

「あ、そうそう」

「千香子！今ね、病室に来る前に、先生のところへ寄ったの。そしたらね！」

「うん」

「千香子、よく頑張ったね！」

「来週、退院よ！」

「え？」

「本当？」

「本当、お母さん！」

「ええ」

「お母さん！」

私は、気が付くと泣いていた。

子供のようにしゃくり上げ、只、泣いていた。

母は、そんな私の頭を優しく何度も何度も撫でてくれて……、

「千香子」

「千香子」

「……………」

「……ありがとう」

「ありがとう」

私の唇から、感謝の言葉が自然に零れ落ち、

「千香子！」

「良かった、良かった……」

と、母も、只……、
喜びを言葉にしていた。

退院

退院当日。

私達家族四人。

久し振りに会ったような気がした。

私は、泣きそうになったのだけれど、病院の正面玄関を出て、大きな空を見上げる頃には、涙は乾いてくれていた。

「さあ、帰ろう」

父が言う。

私が入院中には、口数の少なかった父の言葉を合図に、父の運転する車に乗り、我が家へと向かう。

チ口の死

私は、真っ先に玄関を開け、

「チ口！」

と、呼ぶ。

チ口が、掛けて来るはずだから、

「チ口！」

でも、チ口の姿は無く……。

静まり返る玄関は、私が入院をする為に後にした明るい玄関の雰囲気では無く、どこか、淀んでいた。

「チ口！」

いくらチ口の名前を呼んでも、チ口は姿を現さない。

私は、玄関を上がると、リビングに向かう。

チ口のお気に入りのクッションがあるソファへ……。

「チ口」

「チ口……」

「……………」

呼んでも、呼んでも、チ口の姿は無く……。

「お母さん」

「チ口は？」

思わず、側に居た母に問うと、

「チ口は……」

「……………」

と、口籠る。

「お母さん、チ口は？」

「チ口は、どうしたの？」

「……………」

答えが、返って来ない。

「千香子……」

「千香子、今日はお祝いだよ」

と、父が口を挟む。

なおも私は、

「チ口は？」

と、問う。

父、母、姉、三人が困ったような表情を浮かべ……、

「チ口は……」

姉が、重い口を開こうと……、

「チ口は」

逸る私は、

「チ口は？」

「チ口は、姉さん。チ口はどうしたの！」

「チ口は……」

「……死んだわ」

「え……」

「え？」

「何？」

「どういうこと？チ口は？チ口は、チ口は……」

私は、姉を捲し立てる。

「チ口は……その、病気で先日。死んじゃったのよ」

「そう……」

「チ口も頑張ったの！」

「何言ってるの？」

「姉さん！私、分からないわ！」

「姉さん、姉さん」

「チ口は……」

「お、落ち着きない。千香子」

父が口を挟むが……、

「ねえ、チ口、死んじゃったの？」

「ねえ、どうして死んじゃったの？」

「あんなに元気だったのに！」

自分の言葉に息を呑んだ。

あんなに元気だったとは？

……、

私は、いつのことを言っているんだろう。

「ああ……」

私は、泣き崩れながら……病院での出来事を思い出した。

あれは……、

あれは、もしかしたら、チ口が、私にお別れを言いに来てくれたんじゃないのか？

考えてみれば、おかしい。

夢だと思っていたけれど、妙にチ口の感触があった。

そのチ口の感触が、夢と現実の狭間に私を連れて行き、私に伝える。

「チ口」

「……………」

そうだったのかと、今にして思えばそうだったのかと、私は……、

「ねえ……」

「チ口は……」

「なんで、死んだの？チ口……」

気が付くと、私は姉に詰め寄っていた。

頭では、チ口のことを分かろうと、必死で考えを巡らせているのに……。

「姉さん、チ口は……」

「あ！」

「お母さんが。そういえば、目の病気で言ってたわ！」

「姉さん！」

「チ口は……」

「そう、そうね」

「きっと、病気だと思う」

「思う？」

「何、それ？」

「チ口……死んじゃったんでしょ？」

「……死んだんだったら、死んだんなら、原因があるはずじゃない！」

「千香子……」

「姉さん、教えてよ！どうして黙るのよ！」

「何？私には言えないの？それとも何？私が居なかったからちゃんとチ口の世話……」

と、言いかけ、姉が！

「千香子！」

「いい加減にしてよ——私も、私も苦しいの！」

「苦しいて、何よ！」

「……………」

「チ口は、チ口はね」

「チ口は……目を、目を……目から血を流して死んだのよ！」

「げ、原因は、解からないわ」

「あ、あんたのせいよ！千香子の代わりに……」

「な、何？……」

「チ口は……あんなに小さな体でさ。目から血を流して……止まらなかったのよ。最初は少しだった。けどね、段々と血の量が増えて……最後には入院したけど、三日間、血を流し続けて……死んじゃったのよ——」

「え……」

「あんたのせいよ！」

「千香子」

「あんたの……チ口が……」

「チ口が、可愛かったのは、千香子！あんただけじゃないの！私達家族は……」

「家族は……」

「やめなさい！千影！」

母が止めようとするが、姉は続けて、

「私達家族は、疲れ切ってたのよ……」

「それでも家に帰るとチ口が居て……どれだけ慰められたか……」

「お父さんは、フライトを残念して地上勤務に切り替えたの。私は、個展をキャンセルしたの。辛かったわ……」

「でも……」

「でも、千香子の為じゃない！そうでしょう？」

「そうでしょう？」

「そんな時もね、みんな……チ口の姿を見て慰められたのよ！」

「……やめて」

「もう、やめて千影」

母が、泣き崩れ……、

「私……」

「……………」

「私、私、姉さん。ごめ……ごめん」

「ごめんなさい！」

私は、理解しようとするけれど、まだ、どこか頭がついて行けなくて……、
言葉を伝えたいけれど、言葉が見付からなくて……、
謝りたいけれど、上手く謝ることが出来なくて……、

「馬鹿っ！」

「何、謝ってるのよ、千香子」

「あんたが、謝ることなんてないんだから……」

そう言うと、気丈な姉が涙を流し……、

「私、気が付かなかった」

「そうよね……」

「そうだよね……家族が入院して……それも思わしくなく長引いて……私、自分のことしか考えられなかったよ」

「考えてみれば、お父さんが頻繁にお見舞いに来てくれることも、お母さんが、チ口は姉さんが居るから大丈夫よ。て、言われたことも……」

「迷惑……家族に、迷惑掛けてるて、気が付くべきだよね」

私は、整理の出来ない頭で振り返り、なんとか言葉を捜し家族に伝えた。

「違うの、千香子」

「そうじゃなくて……」

「千香子、姉さんが……ごめんね」

暫しの沈黙が流れる。

「……………」

「ねえ……」

「チ口は、幸せだったかな？」

ふいに、私の口から言葉が出て、

「ええ、ええ、幸せだったわよ」

母が言う。

「私に……」

「私達に逢えて、良かったかな？」

「そうね」

「そうだね、きっと。良かったって、チ口もきっと……」

姉が言う。

私は、ソファに座ると、チ口が好きだったクッションを抱き締めた。

チ口が、小さい頃から好きだったクッション。

噛んでボロボロになっているのだけれど、何故か、捨てることが出来なかった。

そのクッションを抱き締めながら私は母に……、

「お母さん」

「それで、チ口は……」

「チ口のお墓は……」

「あ……」

「チ口の……」

「動物霊園にね、チ口のお墓を作ったのよ」

「そう」

「ええ」

「明日……」

「お墓参りに、行こうかな？」

「千香子。二、三日休んだ方がいいんじゃない？」

「ちょっとだけ……」

「駄目かな？」

「あなたの体調がいいのならいいんだけど……」

「そうね」

「うん。大丈夫」

私は、言葉を続けて、

「ねえ、みんなで行こうよ？駄目かな？」

「ごめんね、千香子。お父さんはお仕事だから……」

「そうか……」

「じゃ、三人で行きましょう」

「行こうか、三人で。ね、お母さん。千香子」

「うん」

私は、家族のお陰で、沢山の人のお陰で、そして……チ口のお陰で、家に帰ることが出来た。
白血病という病気と闘って。

次の日。

私と姉、母の三人でチロのお墓参りに出掛けた。

都内から少し離れた場所にあるのだけれど、母の運転する車での道中は、外の空気に殆ど触れることが出来なかった私には、ドライブがてらと言う感じで、気分転換になった。

動物霊園に入ると、小さな棚が沢山並んでいて、それを見るだけで、なんだか切なくなる。

「ここよ」

「あ……」

そこには、チロの黒い目が愛らしく写った写真と、私が最後にチロに買ってあげた首輪が、遺骨と共に納められていた。

「チロ」

「……………」

チロの名前を口にすると、涙が込み上げて来たが、下唇を噛み締めてぐっと堪えた。手を合わせ、チロのことを思う。

チロのことを思うと、胸が苦しい。

チロとの初めての出会いから……、

昨日、姉が語った。最後のチロの姿まで……苦しくて、切なくて。

母が、俯く私の側で、

「思い出すわね……チロのこと」

「千影、千香子。私達家族は、チロに逢えて良かったわ」

「うん」

俯きながら小声で返事をする私に、姉が、

「そうね、千香子」

「姉さんも、チロが好きだったよ」

「うん」

私の目には、涙が浮かび、零れそうになるが……、

私は堪え、深呼吸をすると、

「そうだね」

「お母さん、姉さん」

「きっと……」

「チロもきっと、そう思ってくれたよね」

母と姉に、言葉を伝えた。

「そうね」

「ええ」

母と姉の愛に満ちた微笑みに暖かさを感じながら、

私達の思いは、きっと、同じなのだと感じた。

それはきっと、チロも同じなのだと私は思う。

「チロ……」

「チロ、私ね。退院、出来たんだよ。まだ……治療は、終わってないんだけどね……チロ、ありがとう、ね」

「チロ……」

「チロ、最後に、私に会いに来てくれたんだよ、ありがとう、ね」

「ありがとう……」

私がそう言うと、何故か、写真のチロが、私を見詰めてくれたような気がした。

「ありがとう」

改めて、チロに言う。

そして……、

私達は、動物霊園を後にした。

エピローグ

私のチロ。

私達家族のチロ。

チロの生涯は幕を閉じた。

「ありがとう、チロ」

登場人物

- ・チロ

この本の題名の犬。ペットの雄のマルチーズ。相沢家のアイドル。

- ・相沢 千香子（あいざわ ちかこ）

主人公。職業インテリアコーディネーター。

なんとなく惰性で毎日を過ごしていたが、彼氏と別れた辺りから体調を崩す。

後に、白血病と解かり、闘病生活に入る。

- ・相沢 千影（あいざわ ちかげ）

主人公の姉。性格は勝気。

姉妹共に絵の世界に憧れ、千影は夢を掴む。

が……、千香子の入院で、初めての個展をキャンセル。

母に代わり、家事全般を引き受ける。

- ・相沢 明（あいざわ あき）

主人公の母。白血病の娘の看病で、ほぼ一日を費やす。

- ・相沢 正巳（あいざわ まさみ）

主人公の父。職業パイロット。千香子の入院が長引き、地上勤務に切り替える。

毎日のように仕事帰りに顔を見せ、千香子を励まし続けた。

あとがき

この本を見つけて下さった皆様、ありがとうございます。
ちょっと、お話をしようかな？と思い、あとがきなどを書いております。

この本「チ口」を書こうと思った切っ掛けは、
怪談で泣ける。しかも、怖いところもあるのに感動で泣ける話。
と、言うのを書いてみたく、挑戦した物語です。

最初に浮かんだのが、もがく、戦う、そして動物。
そこから、病気、小さな生き物、それなら室内犬？何故かマルチーズ？と発展し、
毎日を。夢見た世界に入れず、挫折を味わい、惰性で生きることを選んだ主人公。
などが生まれ、ぼちぼち書き始めました。

しかし！怪談で怖がらせて、しかもいい話！と、言うのは、難関でした。
「……………」

私なりに世界を紡いだのですが……、
怖さには、まったく手が届かずにかな？と、言うのが、私のこの物語を読んだ、正直な感想です。
まだまだ、修行が足りませんね（苦笑）

それでも、この物語は好きです。
書き終わってからも、チ口を含め、登場人物が愛おしいです。

この物語を読んで下さった方に、
怪談ものとしては、物足りなかったと思います。
けれど、何か、心に通じるものがあればなあ……と、思います。

読んで下さって、ありがとうございました。
また、違う本にて、御逢い出来る事を楽しみにしております。

私も頑張って、次の物語を紡がないとですね。

では、また……、
「怪談の火が、貴方様の胸の内に燈る間に、御逢いしましょう」

ミオ

2010年12月 2日 木曜日 (12:39:25)

